２月定例活動「アカマツ林再生プロジェクト」　大舘　学

恒例となったアカマツ林再生プロジェクトも４年目を迎え、ゴウカキを行った林床には赤松の３年生苗をはじめとして、芽を出したばかりの幼苗まで数多く観察されるようになって来ました。しかし、一方で松枯れはとどまるところを知らず、私たちがゴウカキを行った区域内での松の高木は数本になってしまいました。これも自然の摂理として受け止めなければなりませんが、その分新しい息吹きに期待したいものです。

さて、２月２８日（土）の定例活動は天候にも恵まれ、オアシスの森西端に位置する散策路周辺のアカマツ林に久しぶりに多くの人が集まりました。というのも、くらぶ員に加え、今年度の助成を受けたリコー中部㈱の社員の皆さんの大勢の参加があったからです。最初に森におけるアカマツ林の特性や遷移の状況、管理にあたってのポイントなどについて真弓さんの説明をうけてから、現地へ。散策路で囲まれた区域を毎年東に向けて整備しており、今年は周回コースの中ほどまで来ました。枯れて倒木の危険のある松の除伐はもちろん、潅木の整理、林床のゴウカキを行い、暗い森が明るく、そしてさっぱりとした印象の空間に変身しました。

いつもながら、人が沢山集まると作業のはかどりがすこぶるいいのです。作業を終えた後、「西の覗き」のベンチからはるか遠くのツインタワーを眺めながら、幼いアカマツ達があのように立派にそびえる日が来るのを楽しみにして、現地からの報告を終わります。

▲除伐した松は、丸太切りして整然と並べた。これも公園としての身だしなみ。

３月定例活動「第６回萌え木祭り　～テーマ“食”～」　永田　修二

今年も３月２７日に萌木祭りが行われました。今回で６回目となり、回を重ねるごとにこの祭りが森くらぶの年中行事として定着してきたようです。

この祭りは「自分たちが楽しんじゃおう！」ということで始まったのですが、今回は究極の楽しみ、「食」をテーマに掲げました。

好天に恵まれた当日、いつもの活動日より早く集まり祭りの準備に取り掛る、皆手馴れたもので、手際が良いこと。

竹飯、食器用の竹切り部隊、野草の天ぷら用の食材調達係り、それぞれに分かれ森の中へ。この日のために焼いた竹炭に火が入り、早速焼き網に餅が乗った。ガスコンロの上には豚汁用の大鍋が置かれ準備万端。

専属の焼餅係（小池さん？）が現れ、ご自身で需要と供給のバランスを微妙にとっていました。天気が良いからのどが渇く、早くも液体燃料が廻りいい気分に。その間に天ぷらも揚りはじめ、宴もたけなわ、ほんとに楽しい一日でした。

◀▲相生山の竹林から伐り出した竹で、食器をつくる。

◀10時、いよいよ祭りスタート。まずは参加者の自己紹介から･･･。

▶揚がったそばから参加者の胃袋に収まる野草の天ぷらに、調理係は大忙し。

▲竹筒でつくった竹飯、竹パンは焼き具合も味も最高！

「本日の御献立」
- 焼餅
- 焼き筍味噌添え
- 野草の天ぷら
- 竹飯
- 竹パン
- 豚汁　･･･等々

シリーズ『森の住人たち』⑧
～ギンヤンマ～
なんてったってアイドル

ギンヤンマ　ヤンマ科
体長　7ｃｍ内外
環境　池や沼などの周辺
餌　昆虫類

「おっきいヤゴが見つかったよ」
「こっちは、ちっちゃいヤゴだ」

通称トンボ池の観察会は、ヤゴが見つかるたびに子どもたちの歓声があがり、さらにおとなの声も加わって、にぎやかだ。

この日採集したヤゴは、ギンヤンマ約30匹、コシアキトンボ・シオカラトンボの3匹。圧倒的にギンヤンマが多く、参加者一同「意外だ」「どうしてかな～」と。

私たち自然観察指導員メンバーが、オアシスの森開園後2年あとに行った調査がある。どんなヤゴが補虫網にかかるのか、どきどき、わくわく。実はその折の調査も大型ヤゴ10に対して、小型ヤゴ１の割合で、同様の結果だった。

なぜ、ギンヤンマが圧倒的に多いのか。どうして・・・。

ヒントは、「命はつながっている」「食物連鎖」。

春、小さな池を真っ黒に覆いつくすほどヒキガエルのオタマジャクシが誕生する。後足が観察できる頃、数は激減する。ヤゴなどの餌になるからである。そのヤゴも小さなものは、大きなヤゴに命を狙われる立場となる。まさに弱肉強食の世界。

ギンヤンマのオスは腹部第2・3節が鮮やかな水色、メスは緑色。和名は腹部第3節の側面下部にある銀白色紋にちなむ。

強い日差しのなか、大きな体で池の上を飛び交い縄張りをパトロールするギンヤンマは、子どもたちのアイドル！

（文責　自然案内人　近藤記巳子）

※ニュースレター20号で、シリーズ『森の住人たち』の号数を⑥と表記しましたが、⑦の誤りでした。